

あまの世に補を好むといふものなるに精を奪はずもの
ありとてそのゆへに郷の疾を救ふの功多し其の末師居
る子あつたれば業を授けりて弘くして元文三年子家
族を移して居を末師子移し古園才を倡りて時子年三
十七歳自云これ我が家を興すとあふた今迄をりて居れ
たまは本姓を汚すとてとて氏を吉益と改めり
曾祖政慶紀伊子居す天正年間豊後岡をひきめて紀伊を改
るの附政慶信初より海内子終き吉益す笑ふあり家子居れ
たり半笑ふあり自山の族あり世々金蔵産科をつとめて母子名
あり吉益源とてり吉益源とてり吉益源とてり吉益源とてり
この附医業授けりありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありありありあり
造り響ききく生計の助けとてりそのころ莫逆の友ありりり

村尾事といふ人仕友を勧むるに在洞書を贈り扱ひて
云ふは子ハ我知色ありとせむひたり小今ハ己を志を知
るもの子あつたれば我愛くくろろ老親ありとも志を降し
く祖を尊むることを為人や貧ハ士の常あり窮乏ハ
命ありたといふ術ハ行なれずとも天の形をばすも妻ト
ててろく仕へを求めずれば貧困も無く甚く治計
の術あるれば高戒断食して五條ある少彦名廟子詣り
祈念しとて云為則不肖此子て過ちて古醫及小志
くく世の醫者言とてせり推してを初ふ子今己子困
乏子迫り命且又子ありりり醫及の悲ありて天の罰す
る子貧ありりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

命をすまやう子断くあゆむんと云ふ形ふところありと懇
 祈しく帰れりその頃舊お識ある愛慕の許す徳あり
 子への愛慕いとまろこびて金子をせりて東洞子興へ云
 吾あれごう鎌金ありこれを買へて先生の冥を助けまの
 らはるありと云ふ子東洞おせりき國辭して云これこの
 金子と云ふまのいれおくおと請ふるとおおの目か
 どのひみれお愛慕気色をうて云これ何ぞ償そ望の意
 あんやと先生の為のこあもあはるこ天下萬民の性
 命を救はんことをお人お知りてこ入ける東洞その言を感
 じ懐くふけ納免これより家資やうくふ豆をこを徳たり
 あら付一人の病者を治療せら山脇東洋その金子あり

て東洞の業割と夢てた子よりあひその主方の伯耆を感
 いたりてがそれ業を服用してこの病者日あはるて懐氣
 せりて東洞の尋常一板の人あはるを知りて東洞あり
 をまを結ひて親友より東洞の名これよりた子世子懸色
 たりそハ東洞の常子愛慕せられしなくをゆえし寛延四年
 年五十歳ありて類方業極を擧ぐ古醫此規則
 を建てるその東洞の人をあり劉強篤実ありて容身す
 こころ卓絶威風凜凜として美髪帽毛の如く服老人を
 射る子似たり世人あはる信あり信あり懸ふれあれごまの
 さつとも言をせず晩年中津侯祿五百石をりて招くこと
 とも國辭して仕る安永二年七十二歳ありて没す三子あり

板坂ト高名ハ如春存子意高と称すその先甲妙藏田在
 の匠と云ト高医療子國子たるをりく徳送とあまう江戸
 涉州子住めり久々末人馬仲虎が編年五見圖を授刻し
 て世小形ふ蔵書甚多富めり浅草又庫の印記あり今徳
 世子散在せりその又庫北地ハ浅草ちのうろあり富士権現の
 前子ありその地子稻荷の小祠ありそ子初土佐ト高稻荷と
 了文庫の旧地みそ此西地ノうろ々々元々の詩あり徴とす
 浅草川西一、小壺新年風暖見春蔬向門元味弄符
 版更讀時珍綱目書

美成云ト高の奉蹟くくくハ医勝子足々々

名家畧傳卷之一

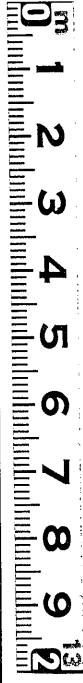
本館

本館

名家畧傳

五七
四

281
2



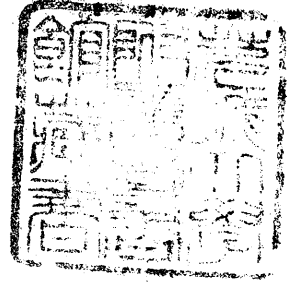


名家畧傳卷之二

蕙蔭堂

蕙蔭堂名ハ孔蒸字ハ世甫木村氏浪華塙江の人あり浪華
 此蕙蔭といふ故事ありをりて蕙蔭堂と号せり世を奉て
 蕙蔭堂をりて世を奉て人蕙蔭堂と知るべ
 るゆれありその人あり世を奉て人蕙蔭堂と知るべ
 通あり其情志寛後して世人小交りを結ぶるものありこ

江戸 山崎美成編
 同 千賀春城訂



こよ物産の物産を究め山海の名種を表はすを集めて
樂と一傍古書畫を愛玩し自ら亦山水を畫たり嘗
て他邦の客ありて訪ひ來るとわれは時言談論終日と
ども倦むとをきくその人より文學を論ず亦あり武技
と談ずるありありハ書を同ひ畫を同ひ亦ハ産物およ
ひ故事より雅小物より各それよりさるる著るものあり
日せりて夜に終ぎ夜をそとく日小終ぐ書讀む往復六
暇日あるとあり四方の旅客浪華より遊ぶもの雅俗とれく
くありてまづ蕙蔭堂より尋ね來りてさるものありて
凡そ四五十年のまじりて疲倦の色をえたりとて京師浪
華の地古より藝園小名なきもの筆出り海内より出る

りのありとてどもその談情雅趣蕙蔭堂の如きものありと
少くを世曉人傳し載すも亦と見えたりと各三事より述す
のこ蕙蔭堂の如く古を考へ今を計り著事より述すも
れ古今ありとも希なり書を長崎に遊歴せし頃唐山の風
俗を同ひてさるる帰りに傳事より述す唐山の如く大成
隨ひ遊すものありて人ありて唐山に風俗を傳し同ふ
ものありて小祿師蕙蔭堂をさるる一人ありてこれを知らず
吾談を費す亦るをたといはさるる小祿師ハりて唐山の如く
投れりて唐山に遊せりありて老れりて蕙蔭堂の如き地を同
遊せりてその國に遊歴すものとありて我考歴察その風土習
俗を詳し知るものありて笑うてさるる堂すてこれよりして

方今唐山孫の凡流好事を以てあそぶとあの人を以て嗜み
 たりて存ありて伊勢子老むらわと備居せりとありて蕪
 葎堂より自皇朝の字子精しく地理名勝山川鶴區ごとく
 皇國を以てこれを蔵弄すかくて未だ至らざる土地も亦て
 取らるもの如くいまも又ざるの山水も已小見るとありて如
 江戸東叡山の葎子井上君流とありて人ありてその容負甚だ
 奇ありされどもあざる人も亦多う蕪葎堂よりこれ
 人とおもを笑くその隣人子たよりを以てて君流が肖像を
 ゆんとと乞ふ君流これぞ笑く夫子よと乞ひ自畫家を乞ひ
 てこが肖像をおごりしめ贈らうとすあは江戸の葎工恩
 池堂のありて浪華子存びてこら蕪葎堂を訪ひて志む

持てせむれその中此慰めよとて一帖を出せりといふ
 のと冊きえふ江戸の葎工の家号を乞へたる名紙といふ
 れれ一枚此送函あり集めありてとてこれらとて
 その好事の勝れも忠像すて蕪葎堂の己を知らざる者を
 ハ多端逆疾ありて笑ひ己がお職をりて丁寧致密と
 して妻たりともや一妻一妾ありて女子一人ありてか態如
 者よく幸へ雍熙の軌を失をなとす蕪葎堂の先祖
 ハ後後又幸基次とす基次そのうと河内乃明ち乃
 後不戦死しくその裔近助芳昌の子吉右衛門を周とす
 りの浪華子存り木村重直が妾と幾が蕪葎堂ハ重
 周が子なり元又元年十月二十六日子生也其初二年正月

二十五日享年六十七歳やうく没す

美成三著書段巻の事跡ハ悟山公の撰する書表不
あつてあるハ撰傳ハべきもの多ううとせよその事
実の詳ハしううつやうううううううううううう
今その子孫亦亦父の志を継ぎ好古を以てゆめと

そ

偏字為

偏字為名ハ貞徳字ハ伊織偏字為ハその号外ハ或妙ノ府侍
の人通称五十嵐定右衛門と号被りて佐田氏を冒す父
ハ井田掾は吉豊政の曾孫事うく家と継ぎ母の五十嵐
を稱しうて父母亦あううううハ江戸子あり谷中子任あり

と年あり偏字為の令とあり性温雅ありて善と樂しと
静を好し非儒佛ハ教その蘊奥と窺ひ究めざることを
さし佛を奉じて佛子候せん非子事うく非不泥ます意
信ハ日教意うううう九そ四十年子至れり中年以來
私子先代舊事本紀ハ涉り志をひそめううその學ハ小
志し著すところ本紀第三十三卷講神祇屋記二十一卷
秘傳邦十八卷空華集十七卷抄うう灌傳深秘の書子至
里うハ總計百二十餘卷子おのううとうう二れうの撰述ま
りてその巻うううう延享三年丙寅の秋奉獻大正こと
さうう仰であううう梅抄四天王寺子納するところハ非事
祭法と偏字為子傳しううううも在冠を賜ううて褒飾